

2017年度公益財団法人日本台湾交流協会フェロースhip事業成果報告書  
(人文社会科学分野)

都市・災禍・文学——芥川文学を例に——

管美燕

台北城市科技大学

招聘期間 (2018年1月16日～2月14日)

2018年

公益財団法人日本台湾交流協会

一 はじめに

2018年2月6日深夜、台湾の花蓮でマグニチュード6.4の大地震が発生した。その時、筆者は東京に研修に来ており、テレビの速報に驚かされたと同時に、台湾にいる家族や親友のことが心配でならなかったことを今でも覚えている。とくに、関東大震災と文学をめぐる研究資料を探っている真っ最中であったため、天変地異に直面した人間の無力さ、そして不可避の運命の怖さを改めて身をもって感じさせられたのである。

1923年9月1日、東京でも未曾有の災害がもたらされた大地震が起こった。芥川の1923年9月16日付葛巻義敏宛の手紙に「東京は地震後の火事の為 大半焼野原になってしまった。その惨害の程度は到底見ないものには想像出来ない」、「本所の被服廠には三万五千人の屍骸がある。大川やその他の川も土左衛門だらけ。僕の見た焼死者だけでも三百以上ある位だ」というように、震災による悲惨さが書き記されている。関東大地震の後、佐藤春夫が室井犀星と一緒に芥川のところへ見舞いに行き、「地震だからいまいましいよ。人間の意志は少しもないのだからね。戦争や何かの惨状とはちがふのだ」<sup>2</sup>と、とうてい関東大震災は人間の意志ではどうにもならず、戦争よりも、さらにどうすることもできない惨事であると芥川は嘆いたのであろう。震災の2か月後、親友の久米正雄は、「最近の芥川龍之介氏」<sup>3</sup>に言及し、「一と頃の彼の仕事は、表面如何にも安心して見てゐられると同時に、内心なんだか不安に感ぜられてならないものを、澱のやうに残したものだ」と、芥川内面の「不安」を露にした。そして、「凡ゆる点で、彼には錆がつき初めたのだ。彼の仕事ばかりでなく、彼の読書にも、彼の骨董漁りにも、彼の振る頤にも、搔き上げる長髪にも。……」というように、親友であるからこそ芥川の肉体や生活、仕事全般に侵食していて、「澱のやうに」潜んでいる「不安」を見抜くことができたのであろう。

「不安」は芥川文学の研究においてしばしば取り上げられる重大なテーマの一つである。三十六年という短い人生の中で三回の対外的な戦争（日清・日露・第一次世界大戦など）、そして関東大震災を経験した芥川であるためか、その後期の作品において、「不安」が大きなテーマとなっている。

本論では、1920年代における芥川文学と芥川が生きていた世界との本質的

<sup>1</sup> 長栄大学応用日本語学科・准教授

<sup>2</sup> 佐藤春夫。「間抜けなとこのない人」。「最近の芥川龍之介氏」。『新潮』第39巻第5号（1923・11）。

<sup>3</sup> 久米正雄。「我鬼窟から澄江堂へ」。「最近の芥川龍之介氏」。『新潮』第39巻第5号（1923・11）。

な関わりや、芥川に「不安」を感じさせた時代背景を整理し、関東大震災や近代日本の対外的な戦争と芥川文学との間テクスト性<sup>4</sup>を分析し、そしてそれらが如何に登場人物に投影されているかについて探っていきたい。

## 二 先行研究

関東大震災の発生後、「不安」を抱えつつ生きている人物が続々と作品に登場し、その「内心なんだか不安に感ぜられてならないものを、澱のやうに残したもの」として一連の「保吉物」が発表された。そのうちの第1号は震災の翌年に発表された「少年」である。

かつての歴史物から作風が一変した私小説風の保吉物に対して、例えば、徳田秋聲<sup>5</sup>、芥川龍之介氏の「少年」は例によって暗示めかした文章の歯切れの好いのに感服させられるし、詩人と哲人との合ひの子のやうな空想じみた一種の物の見方にもそゝのかされるが、「道の上の秘密」にしても、「死」にしても、機智が触れるものにぴつたり触れて行かないで、単に言葉のうへの遊戯にでいかいしてゐるのは、あきたりない」と、不評を呈している。伊藤貴麿<sup>6</sup>も、

「芥川龍之介の「少年」を「読んで居る時、常に微笑の影だにない、謎のやうな作者の顔に直面させられて居るやうな気が」して、「極度に意識を消耗させられる感じがし、時に想像が周旋し、印象が飛躍する所に、快感を感じせしめられるやうに思ふ」と、楽しみながら作品を読んでいる感想には見えない。続いて、「少年」が発表された翌月の「創作合評（五月の創作）」<sup>7</sup>において、菊池寛は「『中央公論』の中では、「少年」なんか面白い方だよ」と言い、中村武羅夫も「感じの悪いものぢやないです」と好感を示しているが、その一方で、宮島進三郎は、芥川の「少年」における「少女が無邪気に出て来ない。牧師との対話も気がきいてはゐるが、つくりもののやうに思はれる。少年物ぢや志賀氏の「かくれん坊」がよく書けてゐる」と志賀氏の作品に劣る「つくりもの」

<sup>4</sup> *intertextuality*。『最新 文学批評用語辞典』の説明によると、これは、「J・クリステヴァの用語。あらゆる文学テクストは先行する他の文学テクストと相互依存の関係にあるという考え方。クリステヴァによれば、孤立したテクストというものはなく、あらゆるテクストは他のテクストを吸収・変形させた、モザイク模様をした引用の織物であると言う。しかしそれは伝統的な文学史観に基づいた縦の影響関係のことではなく、テクスト間の相互の記号体系のフロイト的転移、すなわち、一つの種類の言説の意味が別の種類の言説の意味の上に重ねきされることであると言う」、と定義されている。

川口喬一・岡本靖正編。『最新 文学批評用語辞典』。東京：研究社、2007・3。

<sup>5</sup> 徳田秋聲。「四月の作品」。『報知新聞』（大正13年4月5日・8日）。

<sup>6</sup> 伊藤貴麿。「四月号の創作読後 短編論と短編評（四）」。『東京朝日新聞』（大正13年4月12日）。

<sup>7</sup> 徳田秋聲・菊池寛・加能作次郎・久米正雄・中村武羅夫・宮島新三郎。「創作合評（五月の創作）」。『新潮』第四〇巻第五号（大正13年5月）。

と不評が続き、菊池寛もまた「芥川のこれなど、雑誌社の求めに応じて書いたんだね。無理に」、加能作次郎も「やつぱり半折だらう」と口をそろえたように作品の出来栄えに不満を持っている。

戦後になっても、『少年』は、芥川の中での作品の中では、比較的論じられることの少ない作品である」と清水康次氏<sup>8</sup>が言うように、この作品は研究者の目に留まることはわりと少ないが、芥川を理解するには欠かせない作品であるとその重要性が早くから認められている。例えば、羽鳥一英氏<sup>9</sup>は、「少年」は懐かしい、永遠的な、魂のふるさとを探す作品であるとして、清水康次氏もまた、少年芥川の幻想は知識の獲得により消滅され、そしてそれで自由で豊富な想像力が弱り、無知で無邪気な世界が喪失させられてしまうと、示唆に富んだ論点を指摘したうえ、「少年」という作品の背景を思索する際に関東大地震との関連を見落とすことが出来ないものと、鋭く「少年」と関東大地震との関連性を見抜いている。その延長線上に、大震災による「俗悪的」な東京が破滅的に焼き潰されてから、芥川が初めて記憶に残る「過去の東京」に直面するようになったわけだとする小澤純論や、一連の保吉物は震災後の風景を起点とした作品であるとする安藤公美論も次々と発表されている。

また、関東大震災に触発されて始まったとされる追憶の二、三には 1894 年の日清戦争中旧日本海軍が清国の艦隊に勝った「黄海の海戦」（「少年」における「海」）や 1905 年の日露戦争でロシア極東艦隊の根拠地旅順を陥落させた「旅順港の激戦」（「少年」における「六 お母さん」）なども思い出されている。震災の被害状況を戦災のことに比して「まるで戦争のやう」だと芥川は言うが、そこに連戦連勝した日本人としての驕り高ぶる模様が見られず、そのかわり天災により導かれた人類の大惨事につながる戦争への反省的な態度を見せている。大国真希ら<sup>10</sup>も指摘しているように、芥川は大地震を特殊事件としてではなく、「僕」をふだん気づかないまたは不可視の事件に気づかせる一つのきっかけとして見なしている。確かに、何ともない平凡な幸せは、一旦それが失われてしまった時初めて、その取り返しのできない悔しさが倍増されるのだろう。車内でのごく平凡で普通の「小事件」は、関東大震災という破滅的な大災害と対比されて、初めて非凡になるのではないだろうか。もし、関東大震災が発生しなかったら保吉にこの追憶が思い出されるだろうか。従って、「少年」は、芥川を理解するには「欠かせぬ重要な作品」としている駒尺喜美<sup>11</sup>論や、「少年」のモチーフに潜んでいる「母親願望」を読み取っている三好行雄論のように、芥川の「内心なんだか不安に感ぜられてならないもの」、「澱のやうに」残されたものを解明するには、読み落とすことが出来ない作品であるという点に

<sup>8</sup> 清水康次。「芥川龍之介『少年』論」。『叙説』第 24 号（1997.03）。

<sup>9</sup> 羽鳥一英。「少年」。『国文学』第 17-16 卷（1972・12）。

<sup>10</sup> 大国真希・安藤公美・小島望・遠藤祐。「架橋としての桃源郷思想——関東大震災から現代——」。『福岡女学院大学紀要（人文学部編）24 卷』（2014・3）。

<sup>11</sup> 駒尺喜美。「少年」。『芥川龍之介作品研究』。東京：八木書店、1969・5。

筆者も賛同したい。

### 三 確信への不信による不安

1923年9月1日に起こった関東大震災の翌年に発表された芥川の「少年」は、主人公保吉が三十年後の現在から幼少時代の些細な出来事を回想的に記するという形で書かれた作品である。「一 クリスマス」「二 道の上の秘密」「三 死」「四 海」「五 幻灯」「六 お母さん」というあまり関連性のないように見える六章からなり、それぞれ保吉が四歳、五、六歳、七歳、それから八、九歳のころの思い出が記されている。第一章から第三章、続いてその翌月に第四章から第六章というように、2回に分けて発表されたものであり、文壇では正宗白鳥らによって違う作品として見られたりしたようである。「一 クリスマス」の末尾には、「この数篇の小品は一本の巻煙草の煙となる間に、続続と保吉の心をかすめた追憶の二三を記したものである」と書かれているように、追憶とされるものは第二章から第六章となっており、第一章で記された、震災の3ヵ月後の「乗合自働車」で「仏蘭西人」のカトリック教の「宣教師」と「十一二の少女」との無心な会話がその追憶を呼び起こしたきっかけであり、それを聞いて数時間後、大人になった保吉が「尾張町の或バラックのカフェ」の隅で煙草をふかしながら「二十年前の幸福を夢みつづけ」て記したものである。

「少年」では、「去年のクリスマスの午後」云々というところから始まり、「震災後の東京の道路は自働車を躍らすことも一通りではない」と、1923年12月25日午後主人公保吉が「乗合自働車」で出会った十一二の少女をめぐる話がきっかけで、1924年の時点に幼い時のことが回想的に記されている。関東大震災が起きてまだ3ヶ月しか経たない時期との設定でありながら、「不相変身動きさえ出来ぬ」ほどの満員ということで、大地震により多大な被害を受けた東京ではあるが、道路がまだ復旧されていないものの、市民たちが奮起して生き抜こうとしている模様が見られよう。主人公の堀川保吉は「けふもふだんの通り」乗っただけで「読書」をしようとしたが、それがかなわず、ついに「断念」した。震災前では簡単に手安く出来る「読書」だったが、震災後の現在では「奇蹟を行なふのと同じこと」になってしまっている。そして、その保吉に出来なかった「奇蹟」は保吉の隣にいる「カトリック教の宣教師」によって行なわれている。「仏蘭西人」の宣教師は、震災により破滅状態の東京に身を置きながら「何ごとも忘れたやうに小さい横文字の本を読み続けてゐる」。「何ごとも忘れたやうに」居られるのは宗教心が強いかわりに無関心かのどちらであろう。「異教徒」としているためか「娑婆苦」に苦しめられているためか、保吉はその宣教師に「軽い敵意」さえ感じている。

「乗合自働車」が大伝馬町に止まったところ、一人「十一、二の少女」が乗ってきた。「褪紅色の洋服に空色の帽子を阿弥陀にかぶつた、妙に生意気らしい少女」である。その「小ましやくれた抑揚に富んでゐる」態度に保吉は「思

はず顔をしかめた」。しかも、「彼の経験」により「由来子供は」「清浄無垢のもの」との信念に疑問符を打ち、それは「世界に遍満したセンチメンタリズム」の祟りとまで言った。この「生意気らしい少女」のことに「思はず顔をしかめ」、横文字の本を読み続けるといふ「奇蹟を行つてゐる」宣教師に「軽い敵意を感じ」た保吉ではあったが、その二人の問答を聞いているうちに次第に心情が変換してきた。

「お嬢さんはおいくつですか？」

「あたし？あたしは来年十二。」

「けふはどちらへいらつしやるのですか？」

「けふ？けふはもう家へ帰る所なの。」

「けふは何日だか御存知ですか？」

「十二月二十五日でせう。」

「ええ、十二月二十五日です。十二月二十五日は何の日ですか？お嬢さん、あなたは御存知ですか？」

「ええ、それは知つてゐるわ。」

「ではけふは何の日ですか？御存知ならば云つて御覧なさい。」

「けふはあたしのお誕生日！」

「お嬢さん。あなたは好い日にお生まれなさいましたね。けふはこの上もないお誕生日です。世界中のお祝ひするお誕生日です。あなたは今に、——あなたの大人になつた時にはですね、あなたはきつと……」

「あなたはきつと賢い奥さんに——優しいお母さんにおなりなさるでせう。ではお嬢さん、さやうなら。わたしの降りる所へ来ましたから。では——」

「では皆さん、さやうなら。」

というように、少女と宣教師との間「罪のない問答」を交わしていた。それを聞いているうちに、保吉は外来の権威を象徴する宣教師を前に「けふはあたしのお誕生日」と「落ち着き払つた返事をした」少女に「どう云ふものか、前に思つたほど生意気ではな」くなり、「寧ろ可愛い中にも智慧の光りの遍照した、幼いマリアにも劣らぬ顔」を見いだした。そのうえ、その「少年や少女などに画本や玩具を与へる傍ら、ひそかに彼等の魂を天国へ誘拐しようとする」といふ「犯罪」をしそうにもなる仏蘭西人の宣教師の「幸福に満ちた鼠色の目の中にあらゆるクリスマスの美しさ」すら感じ、いつの間に「人の好いお伽噺の中の大男か何か」のように思われるようになった。保吉は、それは二十年前には自分も「娑婆苦を知らぬ少女」と「娑婆苦を忘却した宣教師」のように「小さい幸福を所有していた」ことを思い出したためであると言つた。ここで、娑婆苦を存分に味わわされて悩まされている現在の保吉の姿が鮮やかになるとと

もに、神様の使者として全人類の平和と幸福のために力を尽くそうと誓うべきの宣教師やそれが象徴する外来の覇権、そして「子供」は「清浄無垢のもの」だという普遍的な信念への不信感も一層浮き彫りにされてくる。

続いて、「二 道の上の秘密」では、「御竹倉」の「藪の中から」「狸の莫迦囃子の聞こえる」という幼少時の保吉が確信した伝説に対する不信、「四 海」では、「従来海の色を青いもの」とする確信に対する不信と「大森の海」の色は「代赭色をしている」という幼少時の保吉の発見に対する母の不信、さらに「満潮は大森の海にも青い色の浪を立たせてある。すると現実とは代赭色の海か、それとも青い色の海か？所詮は我々のリアリズムも甚だ当にならぬと云ふ外はない」というように、大人になった保吉もまた自分の発見に不信、また、「六 お母さん」では、幼少時の保吉が戦争ごっこでの同伴の嘲笑に対する不信と、大人になった保吉がまたその不信を覆すなど、というように、自分が今まで確信してきたことに対し、懐疑または不信感を持つようになってきていることがわかるのではないか。自分の信念に動揺を見せ始め、その自己懐疑、確信破綻はついに不安へと、つながっていくものだろう。或は、何に対しても不安がることから、自己への不信感を持ち始めたとも言えよう。

また、「三 死」という章では、保吉に、四歳の頃の事を思い出させたのだが、「晩酌の膳に向つた」父親が取り上げた「めでたい」という言葉を誤解して、父親と「死」をめぐる口論をした。ある日、父がお風呂から出て行くことから初めて「めでたい」という意味、つまり、永遠に「不在」であり、永久に「消える」ということがわかる。「四 海」では、大森の海の色をめぐる母親と言い争ったことが思い出される。保吉は「従来海の色を青いものと信じてみた」。が、「五歳か六歳の頃」、ある日「父や叔父と遠浅の渚へ下りた時」、「代赭色の海」が目に見えた。「裏切られた寂しさを感じた」が、「海を青いと考へるのは沖だけ見た大人の誤りである」と思った。それで、母が買って来てくれた「浦島太郎」の海を「代赭色」に色をつけて「何か縫ものをしてみた」ところの母に見せたら、褒め言葉どころか「海の色は可笑しいねえ」と言われた。結局、母は「癩癩を起して彼の「浦島太郎」を引き裂いて」しまい、最後まで「代赭色の海だけは信じなかつた」。父親の消えることと母親の自分に対する不信とは10歳未満の少年にどれだけの不安を与えるか。ここで、正に親友の久米正雄が言う芥川の「内心なんだか不安に感ぜられてならないもの」が読み取れ、そして「凡ゆる点で、彼には錆がつき初めたのだ」と感じさせないではおかないだろう。

目の前から父親が消えてしまっただけで不安な気持ちが漂っている物語としてまた遺稿「浅草公園」(1927・3)も挙げられよう。父親とはぐれてしまう主人公少年の彷徨に従い、テキスト全体に「不安」という気持ちによって覆われ、あちこちに蔓延していく。「少年」における父親が風呂から消えてしまうように、「浅草公園」においても父親は「僕」の眼前から消えていった。「僕」は茫然

自失して浅草寺前の仲店を彷徨しながらあちこち父親の姿を探そうとした。射撃屋、玩具屋、眼鏡屋など、店のものに引かれて佇んだりもするが、父親らしい姿を探す→誤認→失望、それでまた探す→誤認→失望というような悪循環に陥る。震災により多大な被害をもたらされたはずの被災地浅草は、客で賑わっていて、震災後の悲惨さから復興へと歩もうとする勢いも見せてくれたが、「松葉杖をついた癡兵」の姿は戦争によるいつまでも抹消できない傷痕となって無言のうちに苦しみを訴えている。「急げ。急げ。いつ何時死ぬかも知れない」というように、人生の無常を不安がる気持ちがあふれている。ここに、震災後の浅草をうろうろしている「癡兵」というイメージをもって震災後の東京に相まってその荒蕪状態をより一層浮き彫りにしようという芥川の意図が指摘できよう。「浅草公園」の「十九」から「二十一」まで、煙草屋で販売されている「Three Castles」が三つの城に化して、そのうちの一つは城門前に銃を持っている兵士が一人、そしてその城門の上には「この門に入るものは英雄となるべし」と掲げられている。また、「煙草の煙は天国の門です」。この場合「天国」へ行くのは「死」へ向かうのと同義ではないか。そうすると、その「天国」＝「死」の煙の城門前の兵士にさえ勝って、城に入ることが出来れば、「英雄となるべし」。つまり、英雄になるのは死に向かうことを意味する。これは、天皇のために死に赴くことも、「癡兵」となって生き返ってくることも光栄であるのだと。このことは日本軍国主義の祟りにほかならない。しかしながら、芥川にとって、本当に怖いのは、死そのものというよりも、信じていた信念が揺らぐことではないか。自分が見てきたもの、経験を通して信じてきたことは、真実であったのか、という信念・自己の価値観への懐疑にこそ、芥川の持つ「不安」の根源があるのではないか。芥川自身が永久に信じていいものは、どこにもないと感じているのではないか。

#### 四 結びに

安藤公美氏は海老井英次氏の観点<sup>12</sup>を取り上げ、「〈道の上の秘密〉〈死の影〉〈代赭色の海〉〈大きいリボンをした少女〉〈無意識に母を呼ぶ声〉、これら〈原体験〉であるはずのものをむしろ解消してしまう形で追憶は閉じられている」というように、「少年」の「二」から「六」を通して「少年期の保吉」の「原体験」を「現出させては消し去り、後には背景だけを残すという描き方をすることは、逆に、消えてしまったものの存在感を確固として残していくことになり、「その芸術表現の根幹になっているのは」「映像表現である」<sup>13</sup>と指摘している。「抹消」によって「イメージの現（幻）出」という映像性を浮き彫りにすることは「追憶」という構成の根幹で、「追憶」という言葉をもって永遠の

<sup>12</sup> 「『少年』論——〈原体験〉解消の追憶を中心に——」。『芥川龍之介論攷』、東京：桜楓社、1985・2。

<sup>13</sup> 安藤公美。「一九二三年のクリスマス——「少年」」。『芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画』。東京：翰林書房、2006・3。



不在という寂しさを我々の心の底に刻んでいくのだろう。かつて、筆者が前田愛の『都市空間のなかの文学』<sup>14</sup>理論に触発され、作品内部の可視部分を通して、作品外部の不可視部分にまで読み取れようという手法で、「奇怪な再会」における威海衛、「南京の基督」における南京、「母」における蕪湖などのように、「地名を媒介に、編みあげられたイメージを現実の場所にかぶせる」ことで、その舞台となる都市空間の歴史的・社会的な意味との間テクスト性、「特定の場所のイメージを喚起し、統合する」効果をはかる作者のねらいを論じた。テクストの内空間を作り上げるために現実の地名を取り入れ、その特定のイメージを喚起するというのは芥川の常套的手法である。作風が変わった後期の作品に至っても同様、例えば、「少年」における保吉が東京生まれ・育ちで、「浅草公園——或るシナリオ——」における少年が東京の浅草を見学・迷うなどという設定は、前述のように、単なる私小説風の作品を作るためではなく、当時の芥川の内心を投射した作品の舞台として関東大震災による破滅的な東京を意図的に選び、要するに、クリストの蘇生が乱世に光りをもたらすと同じく、震災により破滅された東京を保吉の追憶に重ねて過去の東京を呼び起こそうとするのではないかと思われる。

「少年」の執筆のきっかけとされるその少女は、宣教師が譲ってくれた席へ「腰をかけた」ら「膝の上に糸の玉を転がしたなり、さも一かど編めるやうに二本の編み棒を動かす」だしている。そして、宣教師が少女の「魂を天国へ誘拐」する、宣教という「犯罪」をしようとして少女と問答を続けている間でも、少女は「目は油断なしに」しかも「大真面目に」編み棒の先を追っている。この「針仕事をしてゐる」女はよく芥川の作品に登場する。「四海」において思い出された母も「何か縫ものをしてゐた」。かつて、拙稿「芥川文学における東京——関東大震災との関わりから——」<sup>15</sup>などにおいても触れたが、「捨子」「母」などの作品のほか、友人への私信においても「針仕事をしている」女性に対する憧れや愛着が洩らされている。例えば、塚本文宛の書簡には「文学なんぞわからなくたって いいのです ストリントベルクと云ふ異人も「女は針仕事をしてゐる時と子供の守りをしてゐる時とが一番美しい」と云つてゐます ボクもさう思ひます」(1917年5月31日付)<sup>16</sup>と書かれているように、芥川は家庭的で子育てに献身するような貞淑な女性が「一番美しい」と論じている。「あなたはきつと賢い奥さんに——優しいお母さんにおなりなさるでせう」と、宣教師は少女に伝えて降りていった。「世界中のお祝するお誕生

<sup>14</sup> 前田愛。『都市空間のなかの文学』。東京：筑摩書房、2006・7。

<sup>15</sup> 管美燕。「芥川文学における東京——関東大震災との関わりから——」。(日本)東洋学園大学・国際芥川龍之介学会共催。第10回国際芥川龍之介学会創立十周年記念東京大会【都市・震災・文学(Metropolis Earthquake Literature)】国際シンポジウム。2015年8月26~28日。

<sup>16</sup> 1917年佐藤春夫宛書簡にも「針仕事をしてゐる時と子供の守りをしてゐる時と」と記されている。

日」の日に「一番美しい」少女との出会いをきっかけに追憶を始めたわけであるが、「何か縫ものをしてゐた」憧れの女性像と「淫売」でしか生を営めない「お姫様」の女性像とを対比させながら、震災により「灰の山」となってしまい、悲惨を極める東京という都市空間を舞台と選ぶことで、その二つの女性像に生じた軋轢を相呼応させようとしているのではないかと考えられよう。

「かすかに星のかがやいた夜空。そこへ大きい顔が一つおのずからぼんやりと浮んで来る。顔は少年の父親らしい。愛情はこもつてゐるものの、何か無限にも悲しい表情」。しかし、この顔もしばらくのあと、「霧のようにどこかへ消えてしまう」。ここに同じく父親としての芥川の顔が重なっている。昭和2年にこの遺稿「浅草公園——或シナリオ——」を書く時にすでに自殺の意志を念頭に密かに抱えていたであろう芥川は、自分が居なくなったら、父親が見つからない自分の子供たちの不安の気持ちを想像し、投影させていると考えられるのではないかとと思われる。ゆえに、少年が探している「父親の顔」というのは、少年の印象にのこる顔、また永遠に憧れて探したい顔、そして芥川自身を反映する顔など、いくつもの顔が重なっていると思える。そこには慈愛に満ち、しかも無限の悲しさが潜まれている。つまり、芥川が投影しているのはその父親とはぐれた少年であると同時に、その消えていった父親でもあろう。

19世紀末から20世紀初頭にかけて連戦連勝で、国力強勢を極める日本であるが、関東大地震によって近代化されつつあった首都東京は一夜のうち荒蕪にさせられ、「奇怪な再会」(1918)を執筆した際に現実にはあり得ないこととして書き入れられた文脈が現実になって、何もかも「灰の山」となってしまった。そこから生まれた来た無常観は芥川を含む多くの日本人作家に少なからぬ影響を与えたことは容易に考えられる。「少年」から「浅草公園」に至って、芥川がかつて疑うことのなかったこと、例えば見聞きしたこと・親が教えてくれたことなど、すべて真実として疑わずに信じてきたが、その長い間持ち続けてきた信念に対する動揺を見せ始める。また、真実と思ったことは仮構に、のちまた仮構でもないことに気づくなど、真実と仮構との分別が明確にならなくなり、ますます曖昧になってくる。前近代から近代化することによる「一次的喪失」、そしてさらに震災による「二次的喪失」を経験した東京であるこそ、迷いに陥った自我を探す→誤認→失望、それでまた探す→誤認→失望というような永遠に続く不安を表現するのに一番ふさわしい舞台となろう。安藤氏が言う「消すことによるイメージ性の現(幻)出」という「映像表現」の手法のように、何もかも焼き尽くされたため、かえってそこにあったものの面影は、いつまでも深く我々の心に刻まれる。ただ、迷いに陥った自我を探す芥川をともしえる「不安」の少年は、永遠に「彷徨し続け」ていくのだろう。